様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２４４５

研究課題名（和文）近世期日本の「国家像」形成に果たした和歌の思想を解明する新研究

研究課題名（英文）The new research of thought of Waka, which established 'National image of Japan' in early modern Japan

研究代表者
錦　仁（Nishiki, Hitoshi）

新潟大学・人文社会科学系・名誉教授

研究者番号：００１２５７３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、従来の和歌研究に追随せず、和歌の新しい研究を目指した。すなわち『古今集』仮名序→源俊頼『俊頼髄脳』→藤原俊成『千載集』仮名序・『古来風体抄』、そして江戸期へと継承されてきた〈和歌思想〉を平安時代から江戸期までの主に和歌言説を検証して実態と内実を解明した。
　本研究は、東北地方の諸藩において歌枕がどのように処理されて藩内の名所として設定され、それを藩主や藩士たちがどのように和歌に詠んだかを細かく検証し、歌枕・名所がなにゆえに地方の藩内に必要であったかを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来の和歌研究は、和歌は都の貴族の文学として捉え、研究の対象を著名な歌人・著名な作品にほぼ限定して進められてきた。ところが『古今集』仮名序をはじめ平安・中世の歌学書『俊頼髄脳』や藤原俊成の『古来風体抄』に、和歌は神世の昔から存続し、日本人は誰もが歌で心を表現、日本のどこにも定着しているという。そういう和歌観がき近世へと継承されてきた。即ち和歌は日本の歴史性・万民性・国土性を内存させいる。従来の和歌研究は、こうした和歌の根源にある和歌思想に気づいてこなかった。
　本研究はこうしたことを歌学書・歌合等々の言説を検証して具体的に解明し、新しい和歌研究のありかたを実践してみせた。

研究成果の概要（英文）：　I did not follow the conventional research on waka poetry, but aimed at a new study of waka poetry. In other words, I have examined waka discourses from the Heian period to the Edo period to elucidate the actual situation and the inner reality of the waka philosophy that has been inherited from the kana preface of the Kokinshu, Toshiyori Minamoto's "Toshiyori Zuinou," Toshinari Fujiwara's kana preface of Senzaishu,"and Koraihuteisyou, and to the Edo period.In particular, I have examined in detail how Utamakura was processed and set up as a famous place in the domains of the Tohoku region, and how the feudal lords and warriors composed waka poems about it, in order to clarify why Utamakura and famous places were necessary in the domains of the region.

研究分野：日本文学

キーワード：歌枕・名所　古今集・仮名序　和歌の思想　源俊頼　藤原俊成　東北地方の藩主　藩主の和歌活動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまでの和歌研究は、和歌を中央（平安京および鎌倉・江戸等）で栄えた高踏的な文学と捉え、しだいに地方へ伝播し全国に広まったと捉えてきた。〈中央〉中心主義であり、背後に意識的・無意識的の〈地方〉軽視が潜んでいると思われる。すなわち、和歌の制作者は都の貴族および高級な僧侶や武士などを第一に考えるべきであり、かれらの制作した和歌こそ尊いのであって、地方在住者の詠んだ作品や歌論の類はさほど価値がない、と見なし、考察の対象から外す傾向があった。その結果、平安和歌の研究者は、中世以降の地方の戦国武将および江戸時代の地方藩主およびその臣下である文人藩士の詠んだ歌を研究することは少なかった。

和歌の研究は平安時代を主な対象としており、中世・近世の、とりわけ〈地方〉に関連する和歌および歌論書を無視する傾向が強いのである。これが従来の和歌研究であるが、それ自体、大きな誤りがあるわけではない。しかし、古代から近世へと続いてきた長い和歌の歴史を見渡す視点を失っているところがある。和歌は古代を尊仰することを基本として存続してきた。中世・近世においても『万葉集』『古今集』そして三代集、歌人でいえば柿本人麿、紀貫之、藤原俊成、藤原定家らを常に仰慕し、それらの歌と歌論をふまえて詠むゆえに、和歌は日本を代表する伝統的文化として存続してきた。つまり、和歌史は途切れなく時代を超えて続いてきた。したがって、平安時代に対象を絞りすぎると、神世から近世へと続いてくる和歌の歴史を一面から見ていることになりかねない。また、古代から近世へ途切れなく継承されてきた〈和歌思想〉を見失うことになる。

いくつか例をあげる。歌合は『古今集』編纂の二〇年ほど前から、すでに宮廷・貴顕の邸宅において盛んに行われてきた。それらの歌合では「州浜」が用いられた。州浜には畿内の名所が設定されており、それらの名所を歌に詠んで、それを色紙や短冊に書いて、州浜の当該箇所に挿してゆく。歌合が終わると、五畿内を象徴する州浜ができあがる、という仕組みである。すなわち、天皇の支配する国土を象徴するものとして人々の前に現れるのである。

州浜の名所には通常「逢坂の関」が加えられる。都から東国へ、東国から都への通路であることは、畿内を中心に国土が東国へ広がっていることを想起させる。天皇の支配権が日本全土に及ぶことを祈願し、象徴しているとみられる。歌合は『古今集』以前から、日本全土を意識して行われていた。和歌は、地方を包摂する都中心主義を秘めていた。

『古今集』には、歌合で詠まれた歌が数多く入集している。さらに巻二十の「東歌」には東北地方で詠まれたであろう歌枕・名所の古歌が多数見られる。また、紀貫之の作という仮名序は、東北地方その他の歌枕・名所を織り込んだ綴れ錦の文章で以て神世からの和歌の歴史・機能・現状・未来を記している。

『古今集』は地方を無視していないのである。むしろ重視している。従来の和歌研究はこうした事実から目を離している。盲目的に追従するならば、さらに逆行することになる。都の著名な歌人、かれらの詠んだ歌、かれらの書いた歌論書を重視するのはよいとして、それだけに留まって〈地方〉を軽く見るのは間違っている。『古今集』は〈中央〉に立脚して〈地方〉を包摂し、日本全土を意識している。地方へ下る官人の歌を集めた「羈旅」部があるこ

ともそれを物語る。それゆえに日本国最初の勅撰集なのであった。本研究は、そのような従来の和歌研究を批判し新しい和歌研究を目指した。

２．研究の目的

従来の和歌研究を批判的に捉え、新しい和歌研究を興そうとした。これが目的であるが、どういうことを解明の課題とすべきであろうか。分かりやすい事例をあげよう。

（１） 歌枕・名所の研究。これはこれまでも盛んに行われ、現在も盛んに行われている。しかし殆ど例外なく、詠まれた歌枕・名所はどこか、歌枕・名所がどのように詠まれてきたかの解明に終始している。〈場所の考証〉と〈表現史の解明〉である。しかも対象は都の著名な歌人の歌に限られており、しかもかれらの歌論・歌学書を参照するのだから〈都中心主義〉から抜けられない。こうした従来の方法を乗り越えようとした。

（２） 以上の批判的観点をもとに、和歌研究の視点を〈中央〉と〈地方〉の両方に置いて和歌研究を進める。すなわち、都の歌人たちは東北地方の歌枕・名所をどのように意識し、どのように詠んできたかを新しい観点から検証し認定する。歌合の判詞、院政期の歌学書の類も新しい観点から読み直す。和歌の歴史を〈地方〉と〈中央〉の二つの座標から総合的に捉え直した。

（３） 中世以降の地方の戦国武将、江戸時代の地方藩主、それに従う文人藩士たちが自国（領地・藩）の歌枕・名所をどのようなものと認識したか、どのように歌を詠み、全国に発信しようとしたかを解明する。仙台藩は地誌の作成にあたって「阿武隈川」沿いの八つの村に、一首ずつ別々の古歌を与えた。八つの村は、我が村を流れる「阿武隈川」を詠んだ古歌であると書上文書に記した。仙台藩はそういう書上文書をもとに藩撰の地誌を作成した。こうして万葉時代から歌に詠まれてきた「阿武隈川」は、仙台藩の歌枕であることを全国に発信したのである。同じような試みは、白河藩、相馬藩、盛岡藩（南部藩）、秋田藩、津軽藩などにおいても行われた。仙台藩が最も古くから意欲的にとりくんでおり、巧妙であった。こうしたことを明らかにした。

このような課題は前々からとりくんできたが、本研究ではさらに徹底的に各藩の資料を調査・発掘し、東北諸藩の全体が見えてくるように研究を進めた。

（４） 東北地方の諸藩は、どのような国を作ろうとしたか。どのような工夫をしたかを明らかにする。その例として藩撰・私撰の地誌をとりあげた。一例をあげると、弘前藩主は藩儒に命じて『津軽一統誌』を編纂させた。巻頭に自藩のものだという歌枕・名所をいくつもあげて、それらを詠んだ古歌を掲出して、それによって自藩は古代から和歌に詠まれたのであり、辺境・辺鄙な国ではあるけれど古くから都人に知られているのだと主張できるようにした。こうした地誌の編纂は諸藩で行われた。その種の試みを藩ごとに明らかにした。

（５） 藩主の領内巡覧記を発掘・収集する。藩主が領内を巡覧し、先祖に関する事跡、古戦場、他国との境界、また歌枕・名所を見てまわり、その度に歌を詠み、それらをもとに和文の巡覧記を書いた。藩主はみずから領内をめぐり、歌に詠む美しい場所が多数ある国であることを証明しようとした。仙台藩、秋田藩などにおけるその実

態を解明した。

（６） とりわけ庄内藩の和歌資料は調査されてこなかったものが多い。その解読・分析を通して庄内藩主・酒井忠徳と冷泉為泰・日野資枝らとの関係を解明した。とりわけ日野資枝が忠徳に宛てた書状の解読を通して古今伝授の実態を明らかにした。また、資枝の詠作指導のありかた、その指導理念を具体的に明らかにした。

以上の６項目は相互に関連し合っている。単独に、あるいは互いに関連させて研究を進めた。

３．研究の方法

すでに述べたように、地方の藩主や文人藩主らが書いた和歌・歌集（家集）・歌論書・歌合などがこれまでの和歌研究において等閑視されてきた。各地の図書館・資料館・博物館等に、そうした古文書の類がほとんど調査されることもなく死蔵されている。中央の著名歌人が書いたものでないこと、地方の文書・資料であって〈都の文学〉である和歌の研究には役に立たない。そうように認識されてきたことによる。

本研究は、そうした古文書・資料を丹念に発掘し調査した。続いて、一つひとつ読解し、厳密に内容を分析し、それをもとに地方において歌枕・名所がどのようなものとして認識されていたかを解明した。その結果をもとに、東北地方の諸藩において例えば歌枕・名所は何のために必要とされたのか、各藩は歌枕・名所を活用してどのような国作り――国家像の形成に励んだのかを解明した。そして、その根拠が『古今集』仮名序にあることを解明した。

４．研究成果

以上述べた事柄について、主に津軽藩、仙台藩、秋田藩、白河藩、庄内藩における未調査の文書・資料を発掘・分析し、各藩における和歌活動を解明した。各藩とも、平安時代の中央歌人が地方を詠んだ歌をとりあげ、それは我が領内の特定の風景・場所を詠んだものだと主張していること、そして、藩主もみずからそこへ赴き、みずから歌を詠み、美しい和文で領内巡覧記を書いて領民に示すと共に、全国へ向けて発信している例をいくつも発見した。そうして領内巡覧記が松代定信と定信と姻戚等で親しい関係にあった地方の藩主に特徴的に見いだせることを明らかにした。

また、歌枕・名所は和歌だけでなく、俳諧・漢詩にも詠まれた。和歌にも漢詩にも俳諧にも詠むことのできる名所を領内に設けることに定信は熱心であり、藩主たちにも熱心にとりくんだ者がいることを明らかにした。かれらにとって歌枕・名所とは、美しき我が国を造るために必要なものであった。和歌・漢詩・俳諧に詠まれる美しい歌枕・名所のある国を作ろうとした。そういう藩が集合して日本という〈和歌の国〉が成立すると考えたのである。

こうした国作りの根底に『古今集』仮名序に込められた〈和歌思想〉があることを明らかにした。これまでの仮名序の研究は、古今伝授の研究の一環として行われ、解釈は秘伝化して難解であった。仮名序には三つの原理がある。１和歌は神世の昔から存続し未来へ継承される（歴史性）。２和歌は身分の上下・男女の別に関係なく日本人はだれでもむ。外国から来た人も日本に入ると和歌を詠むようになる（万民性）。３日本のどこでも和歌は詠まれてきたし詠まれている（国土性）。仮名序はこの三つを柱としている。

これを〈和歌思想〉と私はよぶ。『古今集』仮名序のあと、源俊頼の『俊頼髄脳』の巻頭

に具体的に記され、それをあたかも引用したごとく藤原俊成の『千載集』仮名序の冒頭が書かれている。さらにそれ以降、さまざまな歌論・歌学書、歌集・家集・歌合の序文・跋文に踏襲されて続いてきた。〈和歌思想〉もまた時代を超えて近世へ伝えられてきたのである。

和歌＝日本、というのが〈和歌思想〉根本である。和歌はそうして続いてきたのであった。この事実をこれまでの和歌研究はどこか無視してきたところがある。

研究成果を示す。次のような報告書を作成し刊行した。書名は『和歌の歴史・和歌の思想――和歌・伝説・歌枕・名所ほか』（私家版・A４版、2020 年 1 月）である。全 4 巻。

各巻のタイトルを記す。学術雑誌等に発表した論文を収録した。

「第１巻　Ⅰ　和歌の歴史・和歌の思想」（全 359 頁）

「第２巻　Ⅱ　歌人とその表現　Ⅲ 和歌に包まれた国―庭園・歌枕・名所」（全 375 頁）

「第 3 巻　Ⅳ「北」の発見―和歌と地方」（全 251 頁）

「第 4 巻　Ⅴ　小町伝説と小町の歌　Ⅵ　八木重吉　その他」（全 253 頁）

なお、近刊予定（本年度中）の単著をあげる。

『和歌の国　日本―歌合を読む』（花鳥社、全 370 頁）

また、次の論文集に本研究の成果論文を発表した。最近刊行された二冊のみをあげる。

ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観』（東アジア文化講座第 4 巻、文学通信、2021 年 3 月）に、「歌枕と名所―湯殿山から象潟へ」を発表した。

浅田徹ほか編『和歌史の中世から近世へ』（花鳥社、2020 年 11 月）に、「歌枕から名所へ―和歌研究の視野に入れるべきか」を発表した。

ともに、歌枕・名所を活用して国作りに励んだ地方藩主の文芸活動を論じたものである。本研究「近世期日本の「国家像」形成に果たした和歌の思想を解明する新研究」（17K02445）は、次の科研費研究「東北地方諸藩の歌枕（俳枕を含む）の名所化とその表現史との関係を解明する新研究」（20K00286）へ連動していく。コロナ禍により調査旅行ができないのが悩みの種であるが、これまでの科研費研究において調査・撮影・収集した資料が大量にあるので、それらの解読・分析をもとに鋭意遂行中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 錦　仁	４．巻 10
２．論文標題 資料の発掘と考察ー庄内藩主・酒井忠徳の西行上人に手向ける歌などー承認へと	５．発行年 2019年
３．雑誌名 西行学	６．最初と最後の頁 175-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 錦　仁	４．巻 2
２．論文標題 歌を詠む名所ー巡見使の旅日記を検証する	５．発行年 2019年
３．雑誌名 説話の形成と周縁　中近世編	６．最初と最後の頁 19-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 錦　仁	４．巻 1月11日
２．論文標題 書評『和歌の黄昏　短歌の夜明け』―通念を打ち砕く鮮烈な日本文学史	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週刊読書人（2020年1月11日）	６．最初と最後の頁 （1）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 錦　仁	４．巻 11月号
２．論文標題 書評・倉田実『庭園思想と平安文学　寝殿造から』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文学11月号　2019年	６．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 11月号
2．論文標題 近世における西行享受の断面	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国語と国文学	6．最初と最後の頁 134-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 錦　仁	4．巻 66
2．論文標題 藤原俊成の歌論――日野資枝から庄内藩主・酒井忠徳へ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 武蔵野文学	6．最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 錦　仁	4．巻 66
2．論文標題 歌枕は存在するか――「末の松山」ほか	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 47－56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 11
2．論文標題 真澄における和歌――本居宣長・林子平・古川古松軒と比較して――	5．発行年 2017年
3．雑誌名 19世紀学研究	6．最初と最後の頁 1－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 2
2．論文標題 北回路――新しい時代を切り開いた旅人たち	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究	6．最初と最後の頁 155－172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 2
2．論文標題 歌合の判詞をたどる	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究	6．最初と最後の頁 173－316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 2
2．論文標題 古川古松軒『松前蝦夷地ノ圖』（岡山県立博物館蔵）を読み解く	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究	6．最初と最後の頁 7－56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 2
2．論文標題 藤堂良道『老婆心　後篇二下』を読み解く	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究	6．最初と最後の頁 57－66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦　仁	4．巻 2
2．論文標題 致道博物館蔵『日野家傳書　大秘抄』――付・解説	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究	6．最初と最後の頁 133－154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 錦　仁
2．発表標題 神道家　堀秀成―秋田の人々に明治の新しい日本を説く（講演）
3．学会等名 順道学会教学研究大会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 錦　仁
2．発表標題 北回路――新しい時代を切り開いた歌人たち
3．学会等名 シンポジウム　語りかける佐渡――『流人』をめぐる歴史・地理・文学（招待講演）
4．発表年 2017年

1．発表者名 錦　仁
2．発表標題 象潟は美しいか――古川古松軒と菅江真澄
3．学会等名 象潟町郷土資料館（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 錦　仁
２．発表標題 意外と保守的な菅江真澄
３．学会等名 東京学芸大学フォーラム（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 錦　仁
２．発表標題 エドナ夫人の写真コレクション――日米野球交流の真実
３．学会等名 東京学芸大学フォーラム（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

１．著者名 倉本一宏・小峯和明・古橋信孝・（錦　仁）	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 300
３．書名 説話の形成と周縁　中近世編	

１．著者名 錦　仁	４．発行年 2019年
２．出版社 （私家版）	５．総ページ数 279
３．書名 東北地方の和歌と伝統と芸能―資料の発掘と考察―	

1．著者名 錦　仁	4．発行年 2020年
2．出版社 （私家版）	5．総ページ数 359
3．書名 和歌の歴史・和歌の思想　第1巻	

1．著者名 錦　仁	4．発行年 2020年
2．出版社 （私家版）	5．総ページ数 376
3．書名 和歌の歴史・和歌の思想　第2巻	

1．著者名 錦　仁	4．発行年 2020年
2．出版社 （私家版）	5．総ページ数 252
3．書名 和歌の歴史・和歌の思想　第3巻	

1．著者名 錦　仁	4．発行年 2020年
2．出版社 （私家版）	5．総ページ数 253
3．書名 和歌の思想・和歌の歴史　第4巻	

１．著者名 錦仁・石井正己	４．発行年 2018年
２．出版社 笠間書院	５．総ページ数 276
３．書名 文学研究の窓をあける	

１．著者名 錦仁・石井正己（共編）	４．発行年 2018年
２．出版社 笠間書院	５．総ページ数 約30
３．書名 文学研究のまどをあける――物語・説話・軍記・和歌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関